

20003

バルサルバ効果によって生じた XP 縦隔拡大所見の一例

【背景】バルサルバ効果とは「息む」ことにより心拍数の減少、血圧降下、血圧上昇をきたす生理的効果である。ER では頸静脈の怒張等で目にする身体所見であり、心臓 CT ではこの効果を考慮しつつ、検査に従事していると思う。今回我々は、胸部 XP にて、バルサルバ効果によって生じた上縦隔拡大所見を経験したので、検査対応の反省を含め、ここに報告する。【症例】70 代男性、2 日前より持続するめまい(非回転性)、嘔気があった。当院にてリハビリ中(半月板損傷にて)、起立時にめまいと冷や汗ありがあり、当院 ER を受診した。現病歴は高血圧、高尿酸血症があげられる。【検査】高血圧以外、検査異常データはなく、胸腹部 XP を施行した。XP 所見に上縦隔の拡大があげられ、造影 CT まで施行した。しかし、異常所見を認めず、再度胸部 XP を施行したところ、所見は消失していた。【考察】ER 受診前より持続する嘔気があり、さらに撮影室にて嘔吐があった。患者は嘔吐、嘔気を堪え、息んだ状態での撮影であった。バルサルバ効果が最大時期に撮影されたものと思われ、そのために鎖骨下静脈まで怒張していたものとする。【反省】撮影時の患者状態を考慮し、撮影時間の変更等の工夫が必要であったと思われる。また、依頼医や読影医に撮影時の患者状態を報告する必要があると思われる。状態把握ができていれば、検査プランが異なったものになった可能性もあり、読影補助の観点から考えても医師とのコミュニケーション不足が懸念される事例であったと考える。